
赤い着物

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い着物

【Zコード】

N9267Z

【作者名】

シユウ

【あらすじ】

雪の降る街の小さな公園で出会った二人の話です。

雪の降る夜。

といつよりもこの地域では常に雪が降っている。雪の降らない日はないほどだ。

そんないつもと変わらない日常の中で、僕は彼女と出会った。

彼女は着物がよく似合う京美人な人だった。あとで聞いた話だけど、家が着物を扱う商売をしているらしく、彼女にとつて私服が着物というのはさして珍しくはないそうだ。

僕が初めて彼女に会ったその日も、着物を着ていた。

いつもよりは少し暖かいけれど、雪がチラチラと降っていたのでそれなりに寒い。

散歩が趣味である僕は、大きな池に沿うようにある三日月の形をした公園を散歩していた。すると白い景色の中に赤い着物を来た彼女が向かいから歩いてきた。

赤い着物に白いストール、白いニット帽。着物も白だつたら完全に風景に溶け込むことができたのである。

僕はいつも違う光景に驚いていたのと同時に、赤い着物を着た彼女に見蕩れていた。

キシリシと雪を踏みしめながら楽しそうでどこか儂げに歩く彼女。

今改めて思うと、きっとこの瞬間から僕の気持ちは彼女に惹かれていたのかもしれない。

だんだんと距離が縮まり、すれ違う瞬間に彼女は小さくおじぎをした。僕もつられて頭を下げる。

完全にすれ違ったあと、僕は思わず振り返った。そして彼女の後ろ姿をぼんやりと眺めていた。

次の日も、同じ公園に来ていた。下心丸出しかと思われても仕方な

いと思つていた。

今日は散歩に行かないつもりだったのだけれど、彼女に惹かれた心はとても手強くて、また公園に連れて行けと胸の中で大暴れしていた。

ストライキを起しそれでは困るので、やれやれと思ひながらも僕は意気揚々と散歩に出向いた。

昨日とさして変わらない時間。しかし昨日よりは雪が多く降つてゐるようを感じる。

視界が若干悪いが、この街で暮らしているなら対して問題になる量ではなかつた。

彼女に会えることを期待しながら心を躍らせて散歩をしていくと、向かい側から彼女が現れた。

今日の彼女は、昨日とは少し色合が違つが、また赤い着物を着ていた。昨日のが『紅色』だとするなら今日のは『朱色』だつた。そして着物だけでは寒いのか昨日と同じく、白いストールと白い二ツト帽もつけていた。

昨日と同じようにすれ違つときになると、彼女は小さく頭を下げる。僕も同様に小さく頭を下げる。

そして僕は昨日と同じように振り返つた。

「あのっ」

昨日は見送った彼女の背中に勇気を振り絞つて声をかけた。もしかしたら声が上ずつていたのかもしれない。

彼女は小さな笑みを零しながら振り返る。

「また明日もここに来ますか？」

彼女はその問いに首を縦に振ると、また元の方向へと歩いて行つた。

次の日も僕は公園を同じ時間に散歩していた。もちろん彼女に会つためだ。

どう考へても不純な理由ではあつたが、昨日の会話をしたあとで来ないわけにはいかない。

そんな言葉で自分を正当化しながら散歩をしていった。

今日も雪が降つてゐる。昨日ほど多くはなく風も無いが、少し水分を含んでいるせいか重い雪が降つていた。

彼女と出会いのあるう場所にたどり着いたと同時に、うすすらと赤い姿が見えてくる。

それを彼女だと認識するのに時間はかからなかつた。

僕は少し小走りで彼女に近づくと声をかけた。

「こんにちわ」

彼女の着物は、先日が『紅色』、昨日が『朱色』だとすると、今日は前の二つよりも断然濃い『緋色』だった。そして白一シット帽とストールはいつもの通りだつた。

「こんにちわ」

彼女は微笑みながら挨拶を返してくれた。思わず笑顔になる。

その後、僕と彼女は短い時間ではあつたが、談笑とは言えないほどの当たり障りのない立ち話をした。

この辺に住んでいるのか?どうして着物なのか?なぜ一シット帽とストールは欠かせないのか?など、本当にどうでもいいことを聞いたと思う。いろいろな質問に彼女は少し驚いたような時もあれば、笑つて答えてくれたりもした。

気が付けば僕ばかり質問する形になつてしまつていて了に気がつき、彼女に聞きたいことは無いかと訪ねたところ、それはまた次回、と言われそこでお開きとなつた。

いつものように彼女の背中を見送つた僕は家路についた。

次の日。

また僕は彼女に会つために公園に来ていた。

しばらくすると彼女が現れ、白い景色の中に赤い姿を映した。今日は最初に見かけた『紅色』の着物だった。

話を聞くと、赤い着物は3色しか持つていらないらしい。

「どうして赤なのですか?」

そう尋ねると、彼女は少しうつむいてしまった。

「今日は私の番ですね？」

少しの沈黙のあと、顔を上げた彼女はいたずらに微笑み言つた。

彼女からの質問も当たり障りのないものだつた。

どうして公園を歩いているのか？この辺の人なのか？私のことを知つているのか？などだつた。

僕は隠すようなことは無かつたので、質問全部に正直に答えた。質問をしていく最中に彼女が懐かしそうな顔で僕に微笑むのが少し気になつた。

そのことを彼女に伝えると、氣のせいだと言われてしまった。

たしかに僕の考え方過ぎのような氣もしたので、深く追求をすることにはなかつた。

また僕は彼女の背中を見送つてから家路についた。

それから2・3日は彼女と公園で話すのが日課になつていた。

彼女と他愛もない会話をして、帰路につく。それだけでとても充実した日々を送っていた。

ある日。

僕は彼女と会つていつもの時間に少し遅れてしまつた。
公園につくと、こつもの時間よりも少し遅れてしまつていたことに気がついた。

男性として、女性を待たせるのは御法度なので、できる限り急いだ。しかし現実とは残酷なもので、彼女よりも遅く着いてしまつた。
どんな罵声を浴びせられてもいいように覚悟を決めて彼女に近づいた。

自分の足元を見て待つてくれた彼女に、遅れてしまったことを詫びた。

赤い着物を着た彼女が顔を上げると、目から涙が溢れていた。
どうしたのかと思って聞いてみた。

「『』めんなさい。今日は来てくれないのかと思いました」「どうやら僕が来なかつたことを心配してくれたらしい。

申し訳ないと思い何度も詫びた。彼女はすぐに平静を取り戻し、二人でいつも通りに会話を楽しんだ。

その次の日。

僕はまたいつもの時間に遅れてしまった。加えて昨日よりもまた少し遅い時間だつた。

あれだけ詫びた直後にこの遅刻。会わせる顔が無いと思いつつも、いつもの場所へと急ぐ。

彼女はまた足元を見ながら待つていてくれた。

彼女の元へたどり着くなり、昨日よりも深く詫びる。そして顔を上げた彼女は目に涙を貯めていた。

「申し訳ない」

「いいのです。もう時間がないということなのでしょう」

僕は彼女が言った言葉の意味がわからなかつた。

「あなたはもう死んでいます」

彼女の話によると、僕はもう死んでいて、この世に居ない人間らしかつた。

全然実感が湧かない僕に彼女はいくつか教えてくれた。

僕がこの公園で死んだ事。時間に間に合わないのは、この世に留まることのできる時間があまり残されていないのでは無いかということ。実際に僕の頭の上に雪が積もっていないということ。言われてみれば合点がいく部分もいくつかあつた。

彼女と毎日別れてから次に公園に行くまでの記憶がぼんやりとしきぎていること。あまり寒さを感じないこと。雪道なのに歩きにくくないこと。そして僕自身の名前を思い出せないこと。そして色々と語った彼女が最後にこう言つた。

「私はあなたの婚約者でした」

「婚約者ですか？」

はい、と頷く彼女は再び目に涙を貯めていた。

「残念ながら僕にはその記憶が無いことを伝えた。

「私はあなたがこの世を去つてから毎日泣いていました。もしかしたらあなたがよく散歩に来ていたこの公園ならば会うことができるかと思い、雪の白にも映える赤い着物を選んできました」

白いニット帽と白いスチールは僕が贈ったものだといつ。

僕は思った。なんて罪な男なのだろうと。自身がこの世を去つた時に彼女に悲しい思いをさせて、何も記憶が無い状態で幽靈となつて、彼女にもう一度心を惹かれ、拳句の果てには再び泣かしてしまった始末。

僕は自分自身が情けなくなつてきて、幽靈で痛みはないが自分の頭を何度も叩いた。

「そんなことをして自分を傷付けるのはやめてください」

「僕はもう痛みを感じません」

「私の心が痛むのです」

自分の胸を押さえて泣き出す彼女。それを見て、みつともないことをしてしまつたと後悔する。

「僕に何か出来ることはありませんか」

きっと幽霊になつてしまつた僕にはそんなに時間が残されていないのだろう。

ならば最後ぐらいは彼女が望むことをしてあげようと思つた。

彼女は少し考えるような仕草をした。

「私を抱きしめてくれませんか」

「しかし僕は幽霊なのであなたに触れられません」

「いいのです」

僕は彼女の目の前まで歩み寄り、触れられないが彼女を抱きしめているように包み込んだ。

彼女もなんとなく抱きしめられているような感覚になつていて目を閉じて立っている。

その時、僕の中に記憶が戻ってきた。しかしそれと同時に自分がか

らだが消えていくのが分かつた。きっと時間が来たのだろう。

彼女は目を閉じてるので気づいてはいないが、もう足が見えなくなっていた。

だんだんと蘇つてくる記憶の中で、笑顔の彼女と僕が楽しそうに笑つてゐる光景が浮かぶ。

彼女の笑顔は、この公園で話していた時と同じような笑顔だった。僕が病で倒れてしまった時の記憶が思い浮かぶ。

彼女は昨日、遅れてきてしまつた僕を心配して泣いてくれた。あの時と同じような顔をしていた。

本当ならばもつと前に気づくべきだったのかもしれないことを、この別れが近づいてきている今になつて思い出している。

そんな自分が悔しいのか、彼女にさみしい想いをさせてしまつていたことが悲しいのか、それともこの今迫つてきている別れが悲しいのかわからないが、僕の目から涙があふれ出てくる。

もう胸の辺りまで消えてしまつている。本当に時間が無くなつてきた。

僕は彼女の名前を呼ぶ。驚いて顔を上げる彼女。その目には大粒の涙が流れていった。

「今までありがとうございました」

「私の方こそありがとうございました。ここで話せた時間はとても楽しかつたです」

「僕も楽しかつた。じゃあ、さよなら」

その言葉に彼女は涙を流しながら、もうほとんど頭が残つていない僕に、満面の笑みで返した。

心残りがないと言えば嘘になるが、とても晴れやかな気持ちだつた。天へと登つて行く途中、真っ白な景色の中に、一つだけ赤い模様を見つけた。

終わり。

(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると大変嬉しいです。

はじめての短編となりますので拙い文章ですが、愛嬌といつて
多めに見てください。

短篇集として出す予定だったものを短編として投稿し直したものと
なります。

良かつたら他の連載小説とかも読んでいただけたら嬉しいです。
でも作風は全然違いますので気を付けてください。

文学チックにかけてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9267z/>

赤い着物

2011年12月28日23時46分発行